

平成 30 年度 日本原子力学会北関東支部講演会 ご講演要旨

～ 第 I 部 ～ これまでの技術功労賞受賞案件の紹介

講演 1-1

講演者：福井 雅裕 氏(日本原子力研究開発機構 核燃料サイクル工学研究所)

演 題：プルトニウム廃棄物処理開発施設 第 2 難燃物焼却設備の安定運転と維持管理に係る改善

概 要：プルトニウム廃棄物処理開発施設第 2 難燃物焼却設備において、前進の施設での知見や第 2 難燃施設自身でのコールド試験の結果を踏まえて、セラミックコーティング SUS304 の腐食発生の課題に粘り強く取り組み、同設備の大きかりな改良を行った。また、難燃性のプルトニウム系固体廃棄物の減容処理の実証と安全かつ安定的な施設運転を成し遂げた。

講演 1-2

講演者：青柳 龍彦 氏(日本原子力研究開発機構 大洗研究所)

演 題：核燃料物質使用施設の高経年化に係る安全性評価手法の開発

概 要：核燃料物質使用施設における高経年化に対する評価の必要性を自己認識し、平成 14 年度から一早く取り組み、地道なデータ収集を通じたデータベースの整備を行った。また、実際に本評価を施設の保全に対して適用して、施設の安全かつ効率的な運転管理に貢献した。

講演 1-3

講演者：岩井 淳 氏(株式会社 千代田テクノル)

演 題：ガラス線量計による放射線被ばく線量測定技術の構築とサービス展開による原子力産業および放射線医療への貢献

概 要：わが国における職業人被ばく管理用モニタリングサービスにおいて、過去にフィルムバッジで培った技術を生かして新たなガラスバッジ(線量計)自動サービスシステムを構築し、原子力発電所、国の研究用原子炉、大学の研究用原子炉の研究者に加え、東日本大震災に伴う東京電力福島第 1 発電所の事故後は地元市民の線量測定も実施するなど、ガラス線量計による放射線被ばく線量測定技術の構築とサービス展開による原子力産業および放射線医療に貢献してきた。我が国の原子力産業、放射線医療に欠く事が出来ないものであり、その成果は国内外における当該分野を先導する優れた技術となっている。

～ 第Ⅱ部 ～ 支部講演会

講演 2

講演者：宮 健三 氏(東京大学名誉教授，日本保全学会理事長，原子力国民会議代表理事)

演 題：日本の将来に向け、原子力の火を灯し続ける

概 要：

原子力の火を消さない国民運動

福島事故以後、7年が経過した。原子力に限れば大激変である。しかし、この大変動も表層的なことと深層的なことに分けて考えるとよい。

表層構造とは、福島事故は国民に大きな衝撃を与えただけでなくメディアの反原発の動きに大きな口実を与えたこと、原発の安全性は著しく改善されているのに危険だと誤解されている、というものである。深層構造とは、国民は何故事柄が原発となると身構えるのか、何故科学的知識が非科学的情緒に負けてしまうのか、福島事故だけで日本の将来を決めてよいのか、などである。

国民は原子力を誤解させられている。日本人の自然放射線被ばく量は2.7mSv/年なのに何故1mSv/年の被ばくを重大視するのか。誤解が日本の将来を決めるのはおかしい。我が国では戦前、進化論と天皇という現人神が平和共存できた。矛盾を何とも思わない世界でも珍しい不思議な国なのである。問題は、このような自主性のないやり方でこれからも独立と繁栄を維持できるのか、ということである。国民はメディアに影響されない自立心を持たないと国は衰退する一方であろう。原子力問題は思考実験に役立つ。

以上